

青木繁、坂本繁二郎、古賀春江とその時代 久留米を巡る画家たち

アーティゾン美術館（東京・京橋） 2020. 11. 03～2021. 01. 24

当美術館の第3回特集コーナー展示では、洋画家の「青木繁」と「坂本繁二郎」を中心に、明治末期～大正～昭和初期にかけて、洋画史に足跡を残した福岡・久留米出身の画家の作品を集めて紹介している。



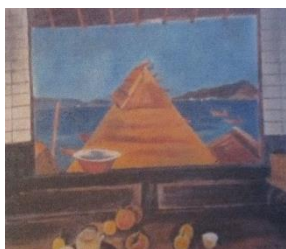
坂本繁二郎 《放牧三馬》 1932年 油彩/カンヴァス

画伯の作品は、平凡でありながら精魂を傾けて、同じモチーフを取り上げながら厳かな静謐を秘めている。馬に惚れ込み、九州各地の久留米近郊や雲仙、阿蘇までの放牧馬や農耕馬を巡るあらゆる情景が心を引き立たせて制作意欲をかきたてていた。本作品は、三頭の放牧馬を配したもので、“馬が立っていると、その背景までもこれに伴奏して美しく、馬体の品格である。”という彼の気持ちがそのまま画面に示されている。

青木繁 《海の幸》 1904年 油彩/カンヴァス 重要文化財

画伯は、美術と文学が結びつくロマン主義の代表的画家で、日本の近代化を象徴する天賦の才人とされている。本作は千葉・館山布良海岸へ写生旅行に出かけ、大魚陸揚げを目にした目撃談からイメージを膨らませて制作した不朽の名作である。この絵画は、構図を決めるために画面を分割した縦横の直線がほとんどそのまま残され、図取りした木炭のデッサンの線も消されずに残っていることや人の顔や脚などの描きかけも散見されるため未完成作品と見られる。

古賀春江 《二階より》 1922年 油彩/カンヴァス



大正～昭和初期に活躍した男性洋画家（春江は通称名）で、日本初期のシュルレアリスムの代表的な画家である。本作品は、1923（大正12）年にパリで開催された「二科展」で、日本の出展作品の一つに選ばれている。